

# 小説フレームアームズ・ガール

## 第8話「止まらない戦争」

### 1. ジークハルトの決意

新型フレームアーム・ヴァルファールを纏ったシオンの活躍ぶりは、瞬く間に世界中で特番が組まれる程の大騒ぎになってしまった。

無理も無いだろう。あれだけの数のグランザム帝国軍を、たった1人であつという間に壊滅させてしまったのだから。

同時にこのシオンの活躍ぶりやヴァルファールの圧倒的な性能は、以前からコーネリア共和国に圧力を掛け続けている各国の首脳たちを、無言で牽制する意味合いをも含まれていた。

下手にコーネリア共和国に武力介入を仕掛けた所で、グランザム帝国軍のように返り討ちに遭ってしまうのが関の山なのだと。兵たちを無駄死にさせるだけなのだと。

だがそれでもヴァルファールの圧倒的な性能故に、何とかしてコーネリア共和国が独占している魔法化学技術を手に入れようと、今まで以上に躍起になってしまった国々も存在するようだ。

中には人道的な措置だったとはいえ前回の戦闘において、中立国でありながらルクセリオ公国騎士団を援護した事を口実にして圧力を掛ける国もあったのだが、それをエミリアは言っている事が意味不明だと、失笑しながら突っぱねてしまったのだった。

人というのは欲深い生き物だ。一度強大な力を手にしてしまえば、それを私利私欲の為に使わずにはられない物なのだ。

もしコーネリア共和国の優れた魔法化学技術を他国が手にするような事態になれば、一体どうなるか……その強大な力を用いて他国への侵略を企てる国が現れてもおかしくないだろう。そうなれば今の戦乱の世の中が一層加速する事になるのは想像に難しくない。

未だに魔法化学技術を手に入れる事を諦め切れない……いや、むしろその執着がより一層激しく深まってしまったシュナイダーのように。

そんな騒動の中でジークハルトは、マチルダと共に彼女の実家を訪れ、今回のミハルの件に関してガイウスたちに謝罪をしに来たのだが……。

「ちょ、ちょっと待ってくれ国王さんよ！！それは国の頂点に立つ者として絶対にやってはいけない事だ！！」

応接室でいきなり自分たちに土下座をするジークハルトの姿に、さすがのガイウスたちも慌てふためいてしまったのだった。

無理も無いだろう。仮にも一国の国王が平民に対して土下座をするなど前代未聞の事態だ。こんな事が世間に知られてしまえば、ジークハルトは周囲から一体どう思われるのか。下手をすれば他国との政治問題に絡んでしまうどころか、重篤な国際問題にもなりかねないのだ。

それでもジークハルトはガイウスたちに頭を下げ続けた。自分の失態のせいでミハルを酷い目に遭わせてしまった事を、心の底から懺悔しながら。

応接室の机の上には、ジークハルトがガイウスたちに差し出した高級菓子折りが置かれている。

「……私が国王として至らなかつたばかりに部下たちの謀反を招いてしまい、結果的にその娘を

危うく犯される寸前にまで追い込んでしまった。それは言い逃れの出来ない事実だ。」

「それはアンタのせいじゃねえよ！！あの金と権力に目が眩んでアンタを裏切った大臣たちが全部悪いんだ！！アンタは国王として本当に良くやってくれているよ！！」

ガイウスは本当に心の底からそう思う。ジークハルト以上に国王として相応しい男はいないと。

その優れた政治力や手腕、人格やカリスマ性だけではない。元々平民出身という事もあってか、自分たち平民に対して本当に良くしてくれている。

それが大臣ら上級職たちには快く思われなかったのかもしれないが、それでも権力を振りかざして自分たち平民を不当に苦しめた先代の国王とは大違いなのだ。

まして、あのシュナイダーのような下劣で非道な男などとは、比べるにも値しない程までに。

そのジークハルトが自分たち平民に対して土下座をするなど、そんな事は到底ガイウスには耐えられないのだ。

「国王さん、もういいですから。ミハルが無事で済んだのは貴方の活躍があつての事なんですから。それに貴方のお陰でマチルダをシオンさんと戦わせずに済んだんですよ？」

緑茶をジークハルトに差し出しながら、イメルダがとても穏やかな笑顔でそう告げた。

確かにミハルを危険な目に遭わせたのはジークハルトの失態なのかもしれない。だがそもそもミハルを犯そうとしたのは裏切った大臣たちであつて、ジークハルトはそのミハルを身体を張って助けてくれたのだ。

そのジークハルトを非難するなど、イメルダには到底出来るはずが無かった。

「・・・シオンか・・・もしかしたら私も、知らぬ間に奴に影響され過ぎてしまったのかもしれないな。」

イメルダに促されて、ようやくジークハルトは苦笑いしながら頭を上げる。

思えばジークハルトは、当初はグランザム帝国は徹底的に潰さなければならないと、そう心に決めていたはずだった。

どちらかが滅ぶまでこの戦争は決して終わらないのだと。妻と娘の命を・・・そして多くの国民や兵たちの命を理不尽に奪った帝国を許す訳にはいかないのだと。

それがどうだ。いつの間にかジークハルトは、先代の皇帝であるヴィクターが内乱の果てに殺された際に、帝国を滅ぼす絶好の機会だったにも関わらず、城下町に攻め入るところか降伏勧告を送って、平和的な解決を図ってしまったのだ。

最もその降伏勧告は、新たな皇帝となったシュナイダーに突っぱねられてしまったのだが。

「奴は軍人でありながら、本当に心優しくてへタレな男だった・・・奴に接する内に、私もいつの間にか甘くなってしまっていたのかもしれん。」

昔のジークハルトだったらヴィクターが死んだ時点で、間違いなく混乱する城下町に総攻撃を命じていただろう。

そしてステイレットたちフレームアームズ・ガール部隊を失い、指揮系統も乱れて大混乱状態に陥っているグランザム帝国軍など、簡単に潰す事が出来ていたはずだ。

それを敢えてせずに降伏勧告を送るという平和的な選択をしたのは、確かにシオンの甘さと優しさに影響され過ぎてしまっていたからなのかもしれない。

だがそれでもシュナイダーは戦争継続の意思を表明し、あろう事かミハルを人質に取り、この可憐な少女を犯そうとまでした。

自国の民がここまでされた以上は、ルクセリオ公国の国王として絶対に許す訳にはいかないの

だ。最早ジークハルトは暴走するシュナイダーをこのままにしておくつもりは微塵も無かった。降伏勧告を拒否した以上、今度こそ徹底的にグランザム帝国を潰さなければならないのだ。ミハルのような犠牲者を、もう二度と出させない為に。

「近い内にグランザム帝国軍が、コーネリア共和国に攻め込むつもりらしい。」

「おいおい、あれだけシオンに叩きのめされたってのに、あのシュナイダーって奴はまだ諦めねえつもりなのかよ!？」

「そうだ。シオンが身に着けていたヴァルファーレとかいう新型フレームアームの性能が、あまりにも圧倒的過ぎたからかもしれんな。」

また戦争を繰り返すつもりなのか……シュナイダーの愚かさに心底呆れかえるガイウスだったのだが、それでもジークハルトはこの機を逃すつもりは微塵も無かった。

「恐らくは新型フレームアームズ・ガール部隊を総動員してまで、奴らはコーネリア共和国に攻め込むつもりだろう。その隙に乗じて我々は帝国の城下町に総攻撃を仕掛ける。」

「そんな、総攻撃って……陛下、何とか話し合いで解決とか出来ないんですか!？」

「今回の件でよく分かった。最早話し合いが通じるような生易しい相手では無いという事がな。」

「そんな……!!」

自分が帝国によって危ない目に遭わされたばかりだというのに、それでもミハルは悲しい気持ちで一杯になってしまっていた。

自国の民を守る為に、自国に対して侵略の意思を示す敵対国を潰さなければならないと考えるのは、確かに国王としてはジークハルトの判断は正しいのかもしれない。

それでもミハルは思うのだ。どうにかして平和的な解決の道を探れないのかと。

だがシュナイダーの愚かさが、ミハルが望むような平和的な解決を許してはくれなかった。

「……アレン伍長。引き上げるぞ。」

「え!？あ、はい。」

緑茶を飲み干したジークハルトが、決意に満ちた表情で立ち上がる。

「今回の件でお前たちには本当に迷惑を掛けてしまった。こんな事をもう二度と繰り返さない為にも、今度こそ我々の手で帝国を徹底的に叩きのめすつもりだ。」

「ねえ陛下、本当に帝国を滅ぼすつもりなの!？」

「そうだ。お前のような悲しい犠牲者を、もう二度と出させない為にな。」

「そんな、陛下……!!」

「……戦わなければ、守れない物もあるのだ。」

悲しみの表情で自分とマチルダを見送るミハルを背に、ジークハルトは静かに、しかし力強くそう呟いたのだった。

## 2. 止まらない戦争

そして3日後……グランザム帝国軍が、再びコーネリア共和国城下町へと侵略を開始した。しかも、前回の時とは比べ物にならない程の大部隊によって。

迎撃するコーネリア共和国軍も城下町周辺に部隊を展開。城下町全体にけたたましい警報が鳴り響き、人々は軍の誘導で一斉に避難施設へと避難していく。

己の欲望の為に、コーネリア共和国の魔法化学技術を何としてでも手に入れようとするシュナイダー。それを阻止する為に、魔法化学技術の流出を何としてでも阻止しようとするエミリア。

各国のトップが両者共に一歩も譲ろうとせず、それ故に両国による戦争という最悪の事態を生む結果となってしまったのだが、それでもエミリアは絶対に引く訳にはいかないのだ。

これは最早コーネリア共和国だけの問題ではない。己の欲望をむき出しにし、世界征服まで高々と公言したシュナイダーに魔法化学技術が渡ってしまえば、この世界は一体どうなるのか。それを阻止する為にも、エミリアは・・・そしてシオンたちは絶対に負ける訳にはいかないのだ。

「・・・時間です。進撃を開始して下さい。」

シュナイダーの命令により、城下町付近で部隊を展開していたグランザム帝国軍が、一斉に進撃を開始。

放たれた無数のミサイルをコーネリア共和国軍の魔術師部隊が、次々と精霊魔法で撃ち落としていく。

そんな凄まじい戦いの様子が世界中の戦場カメラマンたちによって、全世界へと生中継されていた。

『進路クリア。アイラ隊発進、どうぞ！！』

「友と明日の為に！！アイラ隊、出るよ！！」

「「「「「「「「了解！！」」」」」」」」」」」」」」

アイラ隊のオペレーターを務めるミスティからの号令と共に、スティレット・ダガーを身に纏ったアイラたちフレームアームズ・ガール部隊が、一斉に戦場へと飛翔する。

そして上空から城下町を攻めようとする戦闘機やキラードビーグ、モビルアーマー部隊を、マナ・ビームマシンガンで次々と撃ち落としていく。

『スティレット・ダガー部隊出撃完了。続いてヴァルファーレの発進シークエンスに移行します。リニアカタパルト・エンゲージ。ヴァルファーレ全システムオールグリーン。射出タイミングをシオンさんに譲渡します。』

スティレットからのナビゲートと共に、ヴァルファーレのOSが起動。シオンが身に纏うヴァルファーレから、緑色のマナエネルギーの粒子が一斉に溢れ出す。

今回の戦闘では間違いなく、カリンらゼルフィカール部隊も出撃してくるはずだ。それにあのシュナイダーの事だ。どんな卑劣な手を使ってくるか分からない。

厳しい戦いになる事は間違いない・・・それでもシオンは絶対に負ける訳にはいかないのだ。

この国の魔法化学技術をシュナイダーに渡さない為に・・・そして何よりもスティレットを帝国の魔の手から守り抜く為に。

『進路クリア。シオンさん発進、どうぞ！！』

「シオン・アルザード、ヴァルファーレ、出る！！」

スティレットに見送られながら、シオンは無数の弾幕が飛び交う戦場へと飛翔した。

ヴァルファーレから溢れ出す緑色のマナエネルギーの粒子が、まるで飛行機雲のように美しい緑色の線を上空に形成する。

「ここから先は、絶対に通さないんだからあつ！！」

アリュージャのマナ・ビームサーベルが、パワードスーツを身に纏った帝国兵の左胸を情け容赦なく貫いた。

そんなアリュージャを背後から襲おうとするモビルアーマーを、アイラ隊の少女たちがマナ・ビームマシンガンで一斉に蜂の巣にする。

激しい爆音を立てながら、地上へと落下するモビルアーマー。そんなアリュージャたちに息つく暇も与えず、無数のキラビーグたちが一斉にアリュージャたちを取り囲んだのだが。

「行け！！フェザーファンネル！！」

駆けつけたシオンが放った12基ものフェザーファンネルが、物凄い勢いでオールレンジ攻撃を仕掛け、アリュージャたちを取り囲んだ無数のキラビーグたちを一瞬で蜂の巣にしてしまった。

呆気に取られるアリュージャたちを尻目に、城下町に放たれたミサイルを迎撃しに行くシオン。

「おうおう恰好良いねえ！！さすがはルクセリオの英雄殿だよ！！」

そんなシオンに負けてなるものかと、アイラがマナ・ビームサーベルでパワードスーツを身に纏った帝国兵たちを次々と斬り捨てていく。

「アンタたち！！ボサツとしてるとやられるよ！？総員陣形を立て直せ！！このまま一気に押し切るよ！？」

「「「「「「「了解！！」」」」」」」」」」」」」

アイラたちフレームアームズ・ガール部隊、そしてヴァルファーレを纏ったシオンの活躍は凄まじく、グランザム帝国軍は完全に空路からの進軍を断たれる形になっていた。

ならばと地上から攻め入ろうとするものの、そんなグランザム帝国軍にコーネリア共和国軍の地上部隊が、鉄壁の布陣を敷いて立ちはだかる。

パワードスーツを身に纏ったコーネリア共和国軍の兵士たちを、後方から魔術師部隊の精霊魔法が援護する。

そして召喚士部隊によってこの世界に召喚された、サラマンダー、ウンディーネ、シルフといった無数の精霊たちが、コーネリア共和国軍の兵士たちと連携してグランザム帝国軍を押し返していた。

空路はシオンたちによって完全に断たれ、地上も劣勢・・・戦いは完全にコーネリア共和国軍側が優勢かと思われたのだが。

「よし、このまま帝国軍を蹴散らし・・・！？」

『高速で接近する熱源を感知！！ゼルフイカール部隊です！！』

「何だと！？うわあつ！？」

ステイレットからの通信を受けたコーネリア共和国軍の兵士が、一転して驚愕の表情になる。

押せ押せムードのコーネリア共和国軍や人々に絶望を与えるかの如く、突然放たれたリアナのビームマグナムによる一撃が、情け容赦なくサラマンダーたちを一斉に貫いたのだった。

力を失ったサラマンダーたちが光の粒子と化し、再び精霊界へと還っていく。

「精霊魔法だか召喚魔法だか何だか知らないけれど、そんな物で私たちに止められると思ったら

大間違いよ！！」

突如現れたカリン率いるゼルフィカール部隊が、グランザム帝国軍の地上部隊を援護。精霊たちを次々と叩きのめしていく。

あっという間に無数の精霊たちが、物凄い勢いで次々と光の粒子と化してしまう。

カリンたちの介入により地上での戦況は一転して、グランザム帝国軍優位へと変わってしまったのだった。

「例の新型か！？砲火を奴らに集中させい！！これ以上奴らの好きにやらせるなあつ！！」

コーネリア共和国軍の地上部隊がカリンたちに弾幕を浴びせるが、それをカリンたちはビームシールドで易々と受け止める。

そしてコーネリア共和国軍の必死の抵抗を嘲笑うかのように、カリンのビームサーベルがコーネリア共和国軍の兵士たちを、そして精霊たちを次々と斬り捨てていく。

ステイレットにも劣らないカリンの優れた剣術の前に、次々と死体の山が出来上がっていった。

そんなカリンを援護しようと、リアナのビームマグナムが戦車を次々と大破させていく。

だがカリンは戦況を優位に進めながらも、今の状況に違和感を感じていた。

「・・・オラトリオ隊が出てこない・・・！？一体どういうつもりなの・・・！？」

上空ではシオンとアイラ、アリュージュたちが戦場を駆け巡っているのだが、地上部隊にアーキテクトたちの反応がどこにも見当たらないのだ。

空路をシオンたちに任せているからこそ、地上部隊にアーキテクトたちがいる物だとばかり思っていたのだが・・・地上が完全にグランザム帝国軍優位の今の状況においても、何故未だに出てこないのか。

「エミリア・コーネリア・・・一体何を企んでいるの・・・！？」

『あー、君たち？魔法化学研究所だけは絶対に壊してはいけませんよ？まあそれ以外の物なら全部壊してしまっても構いませんがねえ。』

「そんな事はアンタに言われなくたって・・・っ！？」

「カリンちゃん、危ないっ！！」

シュナイダーからの通信に応えようとするカリンに、駆け付けたシオンのマナ・ハイパービームラィフルが襲い掛かった。

慌ててそれをビームシールドで受け止めるリアナだが、あまりの威力に弾き飛ばされてしまう。

「リアナ！？・・・くっ！！」

「はあああああああああああああああつ！！」

シオンのマナ・ハイパービームサーベルを、辛うじてビームサーベルで受け止めるカリン。鏝迫り合いの状態のまま睨み合う2人を、両軍の兵士たちが啞然とした表情で見つめている。

「来たわね！！シオン・アルザード！！」

「これ以上君たちの好きにはさせないぞ！！」

「ここで貴方を倒せば、コーネリア共和国軍の士気は一気にガタ落ちする！！今の貴方はこの国にとって、最早そういう存在なのよ！！」

「そうだね、自覚しているよ！！君たちにその気があるのなら、僕について来い！！」

これ以上カリンたちに地上部隊への被害を出させない為に、シオンは敢えて自らが囷となり、再び上空へと飛翔した。

そんなシオンを追いかける為に、カリンはゼルフイカールの飛行ユニットを展開する。

「たった1人で私たちと戦うつもりなの！？随分と舐められた物ね！！総員シオン・アルザードを迎撃！！あの調子に乗ってる英雄殿を叩きのめすわよ！？」

「「「「「「「「「「イエス、ママ！！」」」」」」」」」」」」」

決意に満ちた表情で、カリンはシオンに斬りかかったのだった。

### 3. 激突、シオンVSカリン

「どりゃあああああああああああああつ！！」

アリュージャのマナ・ビームマシンガンが戦闘機の cockpit を情け容赦なく撃ち抜き、パイロットが即死した事で制御不能になった戦闘機が、力無く地上へと落下していく。

その戦闘機の残骸がグランザム帝国軍の地上部隊目がけてビンポイントで直撃し、それによってさらに地上部隊に甚大な被害が出る。

この時を待っていたと言わんばかりに、さらにコーネリア共和国軍の地上部隊が攻勢へと転じ、グランザム帝国軍を追い詰めていく。

後方の魔術師部隊が放った精霊魔法が帝国軍に降り注ぎ、再召喚された精霊たちが戦場を蹂躞する。

シオンがカリンたちゼルフイカール部隊を抑えている事で、戦況は再びコーネリア共和国軍側の優勢へと変わりつつあった。

その様子を見届けたカリンが舌打ちし、この戦況の流れを再びグランザム帝国軍側に戻す為に、シオンに向かって突撃する。

「行くわよ！！シオン・アルザード！！」

放たれたカリンのビームサーベルを、シオンはマナ・ハイパービームサーベルで受け止める。

スティレットにも劣らないカリンの優れた剣術を前にしても、シオンは一步も引かずに互角に渡り合っていた。

互いに何度も剣をぶつけ合い、2人の周囲に糸状の閃光が走る。

「ステラ、敵の氣勢を削ぐ。彼女たちのリアルタイムの座標データを送ってくれ。」

『同士討ちを誘うんですね？なら彼女たちを指定のポイントに誘導して下さい。出来ますか？』

「問題無いよ。フェザーファンネルで迎撃する。」

カリンと鏖迫り合いの状態になりながら、シオンはフェザーファンネルでリアナたちを狙うが、それでも高速で動き回るリアナたちには一向に当たらなかった。

そしてシオンはカリンの凄まじい気迫の前に防戦一方で、徐々に後退しつつあった。

やはりカリン程の使い手と戦いながらだと、フェザーファンネルの制御も思ったように出来ないのだろうか。こういったビット兵器自体が使いこなすのに相当な空間認識能力が必要で、脳にも相当な負荷が掛かり、普通の人間にはまともに制御する事すら困難だとされているのだ。

「はっ、どこを狙ってるのさ！？この下手糞！！」

「隙だらけじゃん！！このまま一気に叩きのめしてやる！！」

フェザーファンネルによるオールレンジ攻撃を避けながら、ゼルフイカール部隊の少女たちがカリンと鏢迫り合いをしているシオンをロックオンするのだが・・・それはシオンとステイレットが巧みに仕掛けた罠だった。

『彼女たちの指定座標への誘導を確認。合図と同時に離脱して下さい。』

「死ね！！シオン・アルザード！！」

「・・・っ！？待ちなさい貴方たち！！これは罠よ！！」

『・・・今です！！』

シオンを取り囲んだ少女たちがビームマシンガンを放つと同時に、ステイレットからの合図を受けたシオンがカリンの腹を蹴飛ばし、高速離脱。

そしてステイレットによって少女たちが絶妙な位置へと巧みに誘導されていた事によって、放たれたビームマシンガンが味方へと直撃してしまったのだった。

「どあああああああああああああああっ！！」

「うあああああああああああああああっ！！」

自分たちの攻撃によって味方を誤射してしまった事で、シオンの目論見通りに少女たちは一転して氣勢を削がれてしまった。

「ご、ごめんアリス！！」

「ううん、私こそごめん、ラドネイ・・・！！」

「まさかあいつ、さっきまでカリンに追い詰められてたのも、あのビット兵器を散々外したのも、全部わざとだって言うのかよ・・・！？」

「私たちを巧みに誘導して、同士討ちさせる為に・・・！？」

シオンも訓練兵だった頃に一度経験した事があるから分かるのだが、自らの手で味方を誤射する事を一度でも体験してしまうと、どうしても乱戦状態では銃を撃つ事を躊躇うようになってしまう物なのだ。

今回はゼルフイカールの強固な装甲によって守られたから、互いにそれ程のダメージは受けなかったのだが・・・もし自分の手で仲間を傷つけ、殺すような事態になってしまっていたら。

それを想像しただけで、少女たちは思わずゾッとしてしまったのだった。

彼女たちは先程まで巧みな連携によってシオンを追い詰めていたのだが、誤射してしまった今では一転してシオンへの攻撃を躊躇うようになってしまっていた。

「あの人、同士討ちを誘う技術まで持ってるっていうの！？」

「それだけじゃないわ。オペレーターのリードが巧いのよ・・・！！」

驚きを隠せないリアナにそう告げるカリンだったが、この程度の事はカリンの想定範囲内だ。

幾らヴァルファーレを纏っているからと言っても、たった1人で自分たち10人全員をまとめて相手にするなどと豪語したのだ。それにシオンは英雄と呼ばれている程の歴戦の軍人だ。同士討ちを誘う技術くらい持っていて当然だろう。

だからこそ隊長であるカリンが、この悪い流れを一気に戻さなければならない。



「皆、何をビビっているのかしら！？ゼルフイカールの強固な装甲なら、ちょっとビームマシンガンで誤射した程度なら簡単に怪我なんかしないわよ！！」

「だけどアタシら…もしかしてカリンの足手まといになってるんじゃないか…」

「貴方たちは全員、この私が直々に腕を見込んで部隊に引き入れたのよ！？この私が必要だと思ったから仲間にしたのよ！？足手まといだなんて微塵も思っていないわよ！！たかが一度誤射した位で何を怯えているの！？もっと自分に自信を持ちなさい！！」

「カリン…。」

「私が貴方たちに勝利を見せてあげるわ！！総員スカーレットアローの陣形を敷け！！下手に取り囲んでもまた同士討ちさせられるだけよ！！前方に火力を集中させて一気に落とすわよ！！」

この状況においても全く動揺しないどころか、誤射した自分たちを全く責める事無く、逆に威風堂々とした態度で的確な指示を出すカリンの姿を見せつけられた少女たちは、気を取り直して陣形を立て直したのだった。

「『『『『『『『…イエス、ママ！！』』』』』』」

先程までの動揺は、彼女たちからは微塵も感じられない。

カリンについていけば間違いない、自分たちはカリンに必要とされているのだと…その迷い無き自信が彼女たちの表情から満ち溢れていた。

(…やるな。彼女たちの氣勢を削いだつもりだったが、たった一言で彼女たちを再び奮起させてしまうとは…。)

カリンの威風堂々とした姿を見たシオンは、心の中で思わず感心してしまったのだった。

彼女たち全員がいずれも侮れない使い手ばかりだが、その中でも特にカリンは別格だ。

一度剣を交えたからこそ分かる。カリンはスティレットと並ぶ、グランザム帝国軍の中でも最強の実力者だ。それにただ強いだけでなく部下たちからの人望も厚く、部下たちを惹きつけるカリスマ性さえも持ち合わせているようだ。

これ程の軍人であるカリンが、何故士官学校を辞めるような事態になったのか…それはシオンには分からない。だがこれ程の軍人であるからこそ、シオンはカリンに問いかけなければならないのだ。

「何故だラザフォード中尉！！君程の軍人が、何故シュナイダーのような愚かな男に付き従っているんだ！？」

「何ですって！？」

「君だってシュナイダーの愚かさは、身に染みて分かっているはずだろう！？」

ミハルを人質を取って無理矢理マチルダを戦わせようとしたり、世界征服を高々と公言したり、さらには己の欲を満たす為に中立国であるコーネリア共和国にまで戦争を仕掛け、魔法化学技術を手に入れようとしている。

確かにシオンの言う通り、シュナイダーは愚か極まりない男なのだが…そんな物はカリンには関係無いのだ。

父親が勝手に押し付けた多額の借金を、シュナイダーに肩代わりして貰う…だからシュナイダーに逆らう者は全て排除する。カリンにとってそれが、それだけが全てなのだから。

シオンがこの国を、そしてスティレットを守る為に、命を懸けて自分たちと戦っているのと同じだ。

カリンもまた生きる為に必死なのだ。生きる為に死に物狂いでシオンと戦っているのだ。

「だから何だって言うの！？軍人にとって上からの命令は絶対よ！！それは貴方だってそうでしょう！？まあ貴方の場合は独自行動を起こす権限を与えられてるみたいだけど！？」

「それは・・・！！」

「さっき貴方、オペレーターのことをステラって呼んでたわよね！？もしかしてスティレットが貴方のオペレーターを務めているのかしら！？」

ビームサーベルを手にしたカリンが、再びシオンに斬りかかる。

それをマナ・ハイパービームサーベルで受け止めたシオンが、再びカリンと鏝迫り合いの状態になる。

「除隊届を出したのに拒絶されて無理矢理洗脳されて、その洗脳が暴走して味方を大量虐殺して、それで戦う事が怖くなってオペレーターに転向した・・・大方そんな所かしら！？」

「そうだね、確かに君の言う通りだよ。今のステラはもう戦えなくなってしまったんだ。」

「甘い甘い！！甘過ぎるわ！！そんな甘っちょろい考えで世の中を渡っていけると本気で思っているの！？」

「くっ・・・！！」

カリンに弾き飛ばされたシオンに、リアナたちの一斉射撃が放たれる。

何とかマナ・ハイパービームシールドで受け止めて耐え続けるシオンだが、ゼルフイカールの強力な火力の前に完全に押されていた。

シオンの目の前の空間に警告を示す画像が映し出され、ヴァルフアーレからの警告音がけたたましく鳴り響いている。

「ねえスティレット！！聞こえているのでしょうか！？貴方はそうやって悲劇のヒロインでも気取るつもりなのかしら！？私は昔から貴方のそういう所が大嫌いだったのよ！！」

リアナたちの一斉射撃にさらにカリンのビームガトリングガンが加わり、シオンはさらに追い詰められていく。

ロックオンを外して上空へと逃げようとするが、極限まで磨かれたヴァルフアーレの機動性をもってしても、カリンたちの高精度の射撃から逃れることは出来なかった。

カリンたちの射撃の腕にゼルフイカールのOSによるサポートも加わっているというのもあるが、何よりもスティレットと同様にオペレーターのリードも巧いのだ。シオンの動きを先読みし、的確にカリンたちに座標を送ってくる。

「大空を舞い上がれ！！フェザーファンネル！！」

それでもシオンは慌てる事無くフェザーファンネルを展開し、巧みにカリンたちを全方位オールレンジ攻撃で牽制する。

カリンと同じだ。この程度の苦戦はシオンも想定内の範囲内なのだ。

「くっ、このビット兵器さえ何とか出来れば・・・！！」

ビームマグナムでフェザーファンネルを迎撃しようとするリアナだったが、シオンの巧みな制御によって、まるで生き物かと思える位にフェザーファンネルが俊敏な動きを見せる。

先程までシオンを集中砲撃していたのが、フェザーファンネルに全方位オールレンジ攻撃をされ

た事で、カリンたちはシオンへの砲撃を止めて、全員が背中合わせの状態にならざるを得なくなってしまっていた。

「くそっ、何でだよ！？何でここまで精密にビット兵器を制御出来るんだよ！？」

「慌てないで！！これだけの数のファンネルをここまで精密に制御し続けるからには、彼の脳にも相当な負荷がかかっているはずよ！！私がシオン・アルザードに斬り込んで集中を切らすわ！！」

それでも臆する事無く、カリンは再びシオンにビームサーベルで斬りかかる。

フェザーファンネルによる全方位オールレンジ攻撃をも巧みに避け続け、カリンはシオンに至近距離にまで近付き、ビームサーベルを浴びせた。

それをシオンがマナ・ハイパービームサーベルで受け止めた瞬間、シオンの集中が切れた事でフェザーファンネルの動きが一気に鈍くなる。

「今よ！！全方位一斉射撃開始！！」

「「「「「「「「イエス、ママ！！」」」」」」」」」」」」」

カリンの指示で少女たちが全方位に一斉射撃を開始。慌ててシオンがフェザーファンネルをヴァルファールに戻すが、戻し切れなかった3基が被弾し大破してしまった。

確かにカリンの言う通りだ。幾らヴァルファールのOSによるサポートを受けているからとはいえ、これだけの数のフェザーファンネルをあそこまで精密に制御し続けるとなると、シオンの脳に相当な負荷がかかってしまうのだ。それ故にこうやってカリンに集中を切らされただけで、動きに精密さが失われてしまうのだ。

そもそも12基ものフェザーファンネルを全て同時に精密制御し続けられるシオンが化け物なのだが、扱いが難しい武器であるが故に、強さと脆さを併せ持っているという訳だ。

「やるな！！ラザフォード中尉！！」

「貴方はファンネルに頼り過ぎなのよ！！確かに強力な武器だけど脆くもあるわ！！対策さえ万全ならご覧の通りよ！！」

「そうか、君は僕とヴァルファールの事を相当研究していたみたいだな・・・！！」

「何の対策も無しに貴方程の強敵に挑む程、私は自惚れてなんかいないわよ！！」

カリンに弾き飛ばされたシオンに、再びリアナたちの一斉射撃が襲い掛かる。

それをマナ・ハイパービームシールドで、辛うじて受け続けて耐えるシオン。

(アキト、まだなのか・・・この作戦の成否は君たちの活躍に懸かっているんだぞ・・・！！)

カリンたちの猛攻に押されながらも、それでもシオンの瞳からは希望の光が失われていなかった。

#### 4. 総力戦

コーネリア共和国軍とグランザム帝国軍の戦闘が熾烈を極める最中、シュナイダーに狙われている魔法化学研究所の職員たちが慌ただしく動き回っていた。

もしシオンたちが敗北し、この魔法化学研究所がグランザム帝国軍に占拠されるような事態になった場合、エミリアが外部への流出を固く禁じている魔法化学技術がシュナイダーの手に渡る

事になってしまう。

そうなれば魔法化学技術によって帝国の軍事力がさらに強大になり、世界中の国々が帝国の脅威に晒される事になってしまうだろう。

それだけは絶対に阻止する為に、データのプロテクトや暗号化、大量のダミーを混ぜるなど、万が一の事態に備えていたのだが。

「・・・動くな。全員両手を上げろ。」

突然何人かの職員たちが作業を中断し、いきなり立ち上がって懐からマナ・ビームハンドガンを取り出し、慌ただしく作業している他の職員たちに銃口を突き付けたのだった。

いきなりの出来事に職員たちは動揺する・・・かと思われたのだが。

「・・・お前たちがな。」

「な・・・！？ぐはあっ！？」

この時を待っていたアーキテクト、轟雷、迅雷、マテリアが、まるでこうなる事が最初から分かっていたと言わんばかりの絶妙なタイミングで現れ、あっという間に銃を突きつけた職員たちを叩きのめし、拘束してしまったのだった。

そして他の職員たちも慌てる事無く、拘束された職員たちにマナ・ビームハンドガンの銃口を突き付けている。

スティレット・ダガーを身に纏ったアーキテクトの姿に、拘束された職員たちが信じられないといった表情をしていた。

「ば、馬鹿な・・・！？我々がスパイだと何故見抜いたのだ！？」

「正確には見抜いたのは私ではなく、エミリア様なのだがな。」

魔法化学研究所に、いつの間にか帝国からのスパイが紛れ込んでいた・・・だがエミリアはそれを最初から見抜いており、これまでずっと泳がせていたのだ。

恐らくは友軍のグランザム帝国軍が侵攻を開始した際に、コーネリア共和国軍が外部での戦闘に気を取られている間に、内部からかく乱して魔法化学技術を奪取するよう、シュナイダーから命じられていたのだろうが。

しかしエミリアには完全にバレており、こうして呆気なくアーキテクトたちに拘束されたという訳だ。

「この・・・帝国に仇なす裏切り者共が・・・！！」

「否定はしないさ。だが私たちにそうさせたのは皇帝ヴィクターだという事を忘れるな。」

「くっ、無念・・・！！」

アーキテクトに拘束されたスパイの男が、とても悔しそうな表情で歯軋りする。

そんなスパイなど無視し、大型モニターで戦況を見つめていたアーキテクトが、とても厳しい表情を見せたのだった。

「シオンめ、苦戦しているな・・・我々は直ちにシオンの援護に向かう。後の事は任せたぞ。」

「『『『『『『はっ！！』』』』』』」

スパイたちが職員たちに一斉に連行されていく最中、アーキテクトたちは苦戦するシオンを援護する為に、魔法化学研究所のリニアカタパルトで出撃の準備を整えていた。

アーキテクト、轟雷、迅雷が身に着けているのは、発展量産機の新型フレームアームのスティ

レット・ダガー・・・そしてマテリアが身に着けているのは、かつてスティレットが使っていたフレームアームを強化改修した物だ。

『マテリア。今お前さんが身に纏っているスティレット・リペアーは、スティレットの機体をお前さん向けに強化改修した物だ。運用テストをする暇も無く使わせる事になっちまって悪いが、それでも最終調整は済ませてある。機体性能は保障してやるよ。』

リニアカタパルトで待機しているマテリアに、ジャクソンからの通信が送られてきた。

マテリアが身に纏っているスティレット・リペアーの背中から、緑色に美しく輝く蝶の羽が具現化しており、そこから緑色のマナエネルギーの粒子が溢れている。

そのアーキテクトたちを優しく包み込む温かい光の粒子は、まるでマテリアの慈愛と母性を現しているかのようだ。

『機動性だけならヴァルファーレやイクシオンにも匹敵する程だ。お前さんなら大丈夫だとは思いますが、振り回されんなよ？』

「大丈夫です。ステラちゃんの想いが込められた、この機体・・・使いこなしてみせますよ。」

必ずこの国を、そしてシオンを守る・・・マテリアはその決意を顕わにしていた。

『・・・進路クリア。オラトリオ隊、発進どうぞ！！』

「これよりシオンを援護する！！オラトリオ隊、出るぞ！！」

「「「イエス、ママ！！」」」

スティレットからの合図と共に、アーキテクトたちがリニアカタパルトで戦場へと飛翔。物凄い速度で一直線にシオンの下へと向かっていく。

「はあああああああああああああっ！！」

そしてシオンと剣を交えているカリンに、アーキテクトのガンブレードランスが振り下ろされた。

慌ててそれをビームシールドで受け止めたカリンは、一旦シオンから間合いを離して体勢を立て直す。

「オラトリオ少佐・・・！！」

「ラザフォード中尉。お前たちが送り込んだ帝国のスパイたちは、先程私たちが全員拘束した。」

「スパイですって！？シュナイダーめ、私に何の断りも無く、また勝手な事を・・・！！」

アーキテクト、轟雷、迅雷、マテリアが、シオンを守るかのように一斉にカリンの前に立ちはだかる。リアナたちも一旦体勢を立て直し、カリンの所に集合したのだった。

互いに武器を構えながら、睨み合う両陣営。

「済まないアキト、助かったよ。どうやら上手くいったみたいだな。」

「随分と苦戦していたようだが、まだ戦えるか？」

「フェザーファンネルが6基大破したけど、問題無いよ。まだやれる。」

「ならばお前はラザフォード中尉との戦いに専念しろ。残りの連中は私たちが引き受ける。」

「了解！！」

マナ・ハイパービームサーベルを懐から取り出し、再びカリンに斬りかかるシオン。

もう何度目かというシオンとカリンの激しい剣のぶつかり合い・・・そんなカリンを援護しようとするリアナたちだったが、そこへ轟雷のマナ・ビームセレクターライフルが襲い掛かった。

慌ててそれをビームシールドで受け止めるリアナたちだったが、これでは迂闊にカリンの援護に行く事が出来ない。

「迅雷は私と共に先陣を切り込め！！轟雷とマテリアは私と迅雷の援護だ！！」

「「イエス、ママ！！」」

「ステラ、私たちとシオンのオペレートもそうだが、索敵と対空監視も怠るなよ！！」

『イエス、ママ！！』

「よし、では行くぞ！！」

先程まで1対10だったのが、これで5対10・・・だが数的優位は依然としてカリンたちにある。

それでもアーキテクトたちが援護してくれるお陰で、シオンはカリンとの戦いに専念する事が出来るようになり、先程までよりも随分と楽になっていた。

そんなシオンの邪魔をさせまいと、リアナたちと死闘を繰り広げるアーキテクトたち。

「これ以上シオンさんを傷つけさせはしません！！」

「この・・・バンパイア風情が生意気なのよおっ！！」

ヴァルファーレにも引けを取らないスティレット・リペアーの機動性を最大限に発揮し、超高速の動きで少女たちを翻弄するマテリア。

そのあまりに機動性の前に、少女たちはマテリアのロックオンすらままならない。

そして懐からビーストマスターソードを取り出し、轟雷のマナ・ビームセレクターライフルによる援護を受けながら、マテリアは少女たちに斬りかかる。

放たれた剣を少女がビームサーベルで受け止めるが、突然ビーストマスターソードの刀身が鞭状に変化し、まるで蛇のように激しくうねりながら少女に襲い掛かった。

「な・・・！？」

「貫った！！」

「させない！！」

その変則的な動きに惑わされた少女を、リアナがビームマグナムで援護する。

慌てて間合いを離れたマテリアにさらにビームサーベルで追撃しようとするリアナだったが、そこへ迅雷のユナイトソードが襲い掛かった。

何とかビームシールドで受け止めたリアナだったが、そこへ轟雷のマナ・ビームセレクターライフルがさらに追撃を掛ける。

そんな轟雷をビームマシンガンで牽制する少女たち。そしてリアナも迅雷の腹を蹴飛ばして間合いを離し、ビームマグナムで迅雷を狙い撃つ。

まさに壮絶な死闘が、シオンとカリンのすぐ隣で繰り広げられていた。

「さすがにこの人たちは手強い・・・シオンさんが苦戦させられるだけの事はありますね。」

「そうだな、だが私たちの目的はこいつらの足止めだという事を忘れるな。」

互いに背中合わせの状態になるマテリアとアーキテクトだったが、それでもその目からは希望の光が失われてはいなかった。

確かに手強い相手である事に間違い無いが、それでも太刀打ち出来ない程でもない。

それにアーキテクトたちがリアナたちを抑え込めば、シオンはカリンとの戦いに専念出来る。

カリンもまたシオンと同じように、グランザム帝国軍の絶対的なエース・・・それだけに彼女が落とされるような事があれば、グランザム帝国軍の士気は一気にガタ落ちするだろう。

シオンと同じようにカリンもまた、グランザム帝国軍にとって最早そういう存在なのだ。

だからこそアーキテクトたちの役目は、リアナたちの足止め・・・シオンの邪魔をさせない事だ。

そしてそれはリアナたちにとっても同じようで、それ故にシオンとカリンは誰にも邪魔される事無く、壮絶な一騎打ちを繰り広げる事が出来ていた。

「シュナイダー！！アンタが勝手に送り込んだスパイたちが、全員オラトリオ少佐に拘束されたらしいんだけど！！」

『ちっ・・・さすがはエミリアさんと言った所でしょうか。ならば尚更の事、君にシオン君を倒して貰わないといけませんねえ。』

「言われなくてもそのつもりよ！！彼さえ倒せばこの戦いは終わる！！今の彼はこの国にとって、最早そういう存在なのよ！！」

カリンのビームガトリングガンがシオンに襲い掛かり、それをシオンはマナ・ハイパービームシールドで受け止める。

そして右手でビームガトリングガンを正確に乱射しながら、カリンは左手でジャマーグレネードをシオンに投げつけた。

そのジャマーグレネードが、シオンの目の前で激しい光を放ちながら爆発する。

ビームガトリングガンに加えて、ジャマーグレネードの爆風と激しい閃光が、情け容赦なくシオンに襲い掛かった。

「くっ・・・視界が・・・それにこれはレーダーのジャミングか！！」

閃光はすぐに収まったものの、それでもシオンはカリンの姿を見失ってしまっていた。

そしてヴァルフアーレのレーダー機能もジャミングによって低下させられた事で、シオンはカリンの現在位置を座標で知る事も出来ずにいた。

これではカリンもジャミングの影響を受けてしまうが、1対1のこの状況ではそんな物は関係ない。シオンさえ倒せばそれで充分なのだから。

それでもシオンは慌てる事無く、残り6基のフェザーファンネルを周囲に展開。

「ステラ、ラザフォード中尉の現在位置を・・・やはり通信も遮断されたのか・・・ならば！！」

（これで終わりよ！！シオン・アルザード！！）

「ここだ！！フェザーファンネル！！」

「な・・・！？」

いつの間にか背後に回り込んでいたカリンがシオンに斬撃を浴びせようとするが、まるでそれを予測していたかのように、フェザーファンネルが物凄い勢いでカリンに襲い掛かった。

慌ててそれを回避するカリンだったが、そこへシオンのマナ・ハイパービームサーベルが迫る。

「まさか、殺気と気配だけで私の位置を特定したって言うの！？」

「はああああああああああああっ！！」

「何て男なの・・・だけど私だって負けられないのよおっ！！」

もう何度目かという、シオンとカリンの鏖迫り合い。そんな2人の壮絶な戦いぶりを、スティレットは心配そうな表情で見つめていた。

「シオンさん、シオンさんっ！！」

「落ち着けリーズヴェルト中尉！！ジャミングの影響でアルザード大尉への通信は遮断されている！！今はアルザード大尉を信じてオラトリオ隊のナビゲートに集中しろ！！」

隣の席に座る女性士官からスティレットに指示が飛ぶが、もうスティレットはこのままじっとしては  
いられなかった。

この国を、そして自分を守る為に、命を懸けてカリンと戦ってくれているシオン・・・だがそのシオンが、カリンを相手に苦戦を強いられている。

これ以上シオンが苦しめられる光景を、スティレットはもう見たくないのだ。

5年前、シオンは命令違反を犯してまで、命を懸けて自分を助けてくれた。

だからこそ、そのシオンを、今度は自分が助ける番だ。

父や母、そして親友のアスカとアスナを目の前で失ったスティレット。

あんな光景は、もう二度と見たくないから。

「・・・ミッシェル中尉。アキトさんたちのナビゲートをお願いしてもいいですか？」

「は！？リーズヴェルト中尉、いきなり何を・・・！？」

インカムを静かにテーブルの上に置いたスティレットが、決意に満ちた表情で立ち上がる。

「エミリア様、イクシオンの最終調整はもう終わってるんでしたよね！？」

「ステラ、貴方一体何を・・・まさか！？」

「もう見てはいただけません！！私もイクシオンで出ます！！」

「ステラ、ちょっと待ちなさい！！ステラ！！」

シオンへの想いを胸に、スティレットは魔法化学研究所へと走り出したのだった。

## 5. 心を繋ぐエンゲージ

魔法化学研究所のリニアカタパルトで、新型フレームアーム・イクシオンを身に纏ったスティレットが、決意に満ちた表情で遥か彼方の戦場を見据えていた。

その白銀に輝くフレームアーム、そして背中から広がる美しい白銀の翼は、まるでコーネリア共和国を守護する天使を体現しているかのようだ。

緑色に輝く美しいマナエネルギーの光が、スティレットの全身から溢れ出ている。

『スティレット！！お前さんの腕ならイクシオンの性能を存分に引き出せるだろうが、お前さん本当に戦えるのか！？何しろ今のお前さんは・・・』

「大丈夫です。私は戦える・・・私は飛べる・・・！！」

心配そうな表情のジャクソンを、というよりも再び戦場に赴く自分自身を安心させる為に、スティレットは気丈な笑顔をジャクソンに見せた。

皇帝ヴィクターに無理矢理施された洗脳が暴走し、帝国軍の兵士たちを大量虐殺してしまった事で、スティレットは武器を手にする事に恐怖心を抱くようになってしまい、もう二度と戦う事が出来なくなってしまった。

だがそれでもシオンたちと共に亡命したコーネリア共和国が、自分たちを温かく出迎えてくれた



コーネリア共和国の人々が、今こうしてグランザム帝国の脅威に晒されてしまっている。

そんなコーネリア共和国の人々を、帝国の魔の手から守りたいから・・・そして何よりも自分を守る為に必死に戦ってくれているシオンたちが、カリンたちゼルフィカール部隊を相手に苦戦を強いられている。

もうスティレットは、これ以上黙って見ている事など出来なかった。

『リニアカタパルト・エンゲージ。イクシオン全システムオールグリーン。射出タイミングをリーズヴェルト中尉に譲渡します。』

リニアカタパルトが起動し、スティレットの身体が宙に浮く。

精神安定剤の数を1日3回に減らしたとはいえ、それでも今のスティレットは無理矢理施された洗脳の影響で、精神的に未だ不安定な状態にある。

正直言って今も武器を手にするのに恐怖心を感じる。マナ・ホーリービームサーベルの柄を握るスティレットの右手が震えていた。

それでもスティレットは静かに目を閉じて深呼吸をし、頭の中でシオンの姿を・・・そして全身でシオンの温もりと感触を思い浮かべ、強く願う。

シオンさんを守りたいと。シオンさんを失いたくないと。

「大丈夫・・・私は飛べる・・・シオンさんと一緒なら、私はどこまででも高く飛んでみせる！！」

その強い思いによって、スティレットの右手の震えが見事に止まったのだった。

『進路クリア！！リーズヴェルト中尉、発進どうぞ！！』

「スティレット・リーズヴェルト、イクシオン、行きます！！」

リニアカタパルトから射出されたスティレットは、まるで飛行機雲のような緑色のマナエネルギーの粒子を空中に残しながら、猛スピードでシオンたちの下に向かう。

「あれはリーズヴェルト中尉！？それに白銀のフレームアームだと！？」

「お前たち、何を躊躇っておるか！？かつての上官だろうと今の奴は裏切り者なのだぞ！！撃て！！撃ち殺せえっ！！」

「りよ、了解！！」

そんなスティレットにカリンたちの邪魔をさせまいと、パワードスーツを身に纏った帝国兵たちが何人も立ちほだかり、一斉にビームマシンガンを浴びせる。

だがそれでもパワードスーツ如きでは、イクシオンを纏った今のスティレットは止められなかった。

「邪魔だああああああああああああああっ！！」

「どああああああああああああああっ！？」

物凄い勢いでマナ・ホーリービームサーベルによる斬撃を浴びせられ、目の前で無数の閃光が走ったと思った瞬間、帝国兵たちのビームマシンガンがバラバラになってしまう。

その美しさすら感じられる程の、スティレットの達人クラスの剣術から放たれる剣閃を、帝国兵たちは目で追う事すら出来なかった。

まともに抵抗する暇も無く武器を壊され、唾然とする帝国兵たちを無視し、スティレットはあっという間にシオンたちの所に辿り着く。

「ステラちゃん！？」

「リフレクタービット展開！！」

そしてゼルフィカール部隊の少女たちに取り囲まれているマテリアたちに向けて、イクシオンの背中の翼から12基ものリフレクタービットが一斉に放たれた。

それがマテリアたちを守る盾となり、少女たちが放つビームマシンガンの弾を反射する。

「くっ、何なのよ、これはあつ！？」

「ビームを反射する！？こいつもビット兵器かよ！？ふざけやがって！！」

リフレクタービットでマテリアたちを援護しながら、ステイレットはシオンにビームガトリングガンを浴びせるカリンに、マナ・ホーリービームサーベルで斬りかかる。

「カリンちゃんああああああああああああああん！！」

「な・・・ステイレット！？くっ・・・！！」

ステイレットの斬撃をビームサーベルで受け止めたカリンは、そのままステイレットと鏝迫り合いの状態になった。

互いに剣をぶつけたまま睨み合う、カリンとステイレット。

「ステラ、大丈夫なのか！？今の君は・・・！！」

「私は戦えます！！シオンさんと一緒なら！！」

「フン、恋人の危機に慌てて駆け付けたって所かしら！？だけど戦う事が怖くなってオペレーターになった臆病者如きが、私に勝とうなんて100億万年早いだよ！！」

ステイレットとカリンが互いに剣を何度もぶつけ合い、2人の周囲に糸状の閃光が走る。

その2人の凄まじい戦いぶりを、シオンが心配そうな表情で見つめていたのだった。

かつて士官学校で共に訓練に励み、研鑽し合った者同士の戦い・・・だがそれでもカリンは一切合切容赦するつもりは無かった。

目の前に立ちはだかる者は、例え誰だろうと容赦なく排除する・・・それがシュナイダーを守る事に繋がり、父親が勝手に押し付けた借金をシュナイダーに肩代わりして貰う事に繋がるのだから。

「カリンちゃん、どうしてなの！？どうしてあんな皇帝シュナイダーみたいな非道な人の為に、ここまで命を懸けて戦えるの！？どうして！？」

「そんなの貴方には関係ないわよ！！帝国の事なんか正直どうでもいい！！私は私の目的の為に戦っているのよ！！」

「カリンちゃんの目的って何！？あんな身勝手な人の私利私欲の為に、何の罪もないこの国の人たちを傷付けてまで果たさないとイケない目的って、一体何なの！？」

「貴方に言った所で、どうせ理解なんか出来ないわよ！！それに貴方に理解して貰おうとも思わない！！」

何故カリンがシュナイダーのような愚か者の為に、ここまで凄まじい気迫を見せながら戦えるのか・・・それは事情を知らないステイレットには分からない。

ならばステイレットは、その事情を無理矢理にでも知るだけの話だ。

「・・・互いの相互理解を深め合い、互いの想いを繋げ合う・・・それがこのイクシオンに秘められた真の力・・・！！」

「スティレット、貴方一体何を・・・！？」

「私はカリンちゃんに全てをさらけ出す！！そして私はカリンちゃんと心を繋げる！！」

カリンの右手を左手で掴んだスティレットが、決意に満ちた瞳で叫んだ。

「エンゲージ・システム、起動！！」

次の瞬間、スティレットとカリンの意識が、温かい光の温もりに包まれた。

互いの心が繋がり、互いの想いが、互いの記憶が、互いの心が、互いの中に入り込む。

そしてスティレットは思い知った。カリンがシュナイダーの為に戦う本当の理由を・・・父親が勝手に押し付けた借金に苦しめられている、そんなカリンの深い悲しみを。

そしてカリンも思い知った。ラキウスや皇帝ヴィクターの身勝手さのせいで全てを奪われた、そんなスティレットの深い悲しみを。

互いの心を繋げ合い、言葉ではなく『思い』で会話をする・・・それによって言葉の齟齬による誤解が無くなり、本当の意味で互いを理解し合える・・・それが『分かり合う』という事。

これこそが、イクシオンに秘められた真の能力・・・エンゲージ・システムの力なのだ。

今、スティレットは全てを理解した。カリンのこれまでの凄惨な人生を。

風俗店で何人もの男に抱かれてまで、ゴミ箱から残飯を漁ってまで、父親から勝手に押し付けられた多額の借金を何とか返そうと、これまで必死に生き抜いてきたという事を。

今、カリンは全てを理解した。スティレットのこれまでの凄惨な人生を。

両親も親友も、住む家も財産も、記憶さえも失いながらも、それでも希望だけは決して失わず、これまで必死に生き抜いてきたという事を。

「リーズヴェルト中尉！！カリンちゃんから離れろおっ！！」

「「・・・っ！？」」

リアナがスティレットをロックオンした事でイクシオンの安全装置が作動し、エンゲージ・システムが自動解除。2人の意識が現実世界へと引き戻された。

放たれたビームマグナムを、シオンがマナ・ハイパービームシールドで受け止める。

「ステラ、大丈夫か！？」

「私なら大丈夫です。でもカリンちゃんは・・・！！」

再びマナ・ホーリービームサーベルを構えるスティレットだったが、エンゲージ・システムによって自分の心の中を覗き見されたカリンが、怒りの形相でスティレットを睨み付けたのだった。

「この・・・よくも私の心の中に土足でズケズケとおっ！！」

「カリンちゃん、どうしてリアナちゃんたちに借・・・」

「言わないで！！リアナたちに言ったら殺すわよ！！スティレット！！」

「くっ・・・！！」

放たれたビームガトリングガンを、スティレットはマナ・ホーリービームシールドで受け止める。

互いの心を繋げ合い、想いを深め合う・・・それがイクシオンのエンゲージ・システムの力。

だが他人に知られたくない、秘密にしておきたい事くらいは、誰の心にも1つや2つ位あってもおかしくは無いだろう。いわばプライバシーの侵害という奴だ。

カリンにとっての借金の件が、まさにそれ・・・リアナたちに知られたくない・・・いや、リアナたちを

『巻き込みたくない』というのがカリンの本音なのだろう。

そんなカリンの心情は、カリンと心を繋げ合ったスティレットだからこそ理解出来ていた。だからこそスティレットは、カリンに言わなければならないのだ。どうしてそうやって何もかも、自分1人だけで抱え込んでしまうのかと。

「・・・ねえ、カリンちゃん・・・私がリアナちゃんの立場だったら、私、本気で怒るよ？」

「何ですって・・・！？」

「カリンちゃんにとってリアナちゃんたちは、その程度の存在でしかないって事なの？」

「うるさい！！言ったでしょう！？貴方に理解して貰うつもりは無いって！！」

ビームガトリングガンスティレットに撃ち続けるカリンだったが、ゼルフィカールのエネルギー残量が残り僅かになった事を示す警告音が鳴り響いた。

確かにゼルフィカールの性能は凄まじいが、マナエネルギーを動力源にする事で無限稼働を実現しているヴァルファーレやイクシオンと違い、バッテリーで稼働しているゼルフィカールではどうしても稼働時間に制限が生じてしまうのだ。

予備のバッテリーパックは残り1個あるが、それでもこのまま長期戦になれば、明らかにカリンたちがジリ貧になってしまうだろう。

「ビームガトリングガンを使い過ぎたか・・・だったらこれで決着を付けてやる！！」

カリンがジャマーグレネードをシオンとスティレットに投げつけ、凄まじい閃光が2人を包み込む。視界を塞がれ、通信もレーダーも妨害されてしまった・・・だがそれでもシオンもスティレットも冷静さを失わず、2人でしっかりと手を繋いだ。

「シオンさん！！」

「行くぞステラ！！」

「エンゲージ・システム、起動！！」

イクシオンのエンゲージシステムによって、シオンとスティレットの心が繋がる。互いの想いが、互いの記憶が、互いの心が、互いの中に入り込む。

「大空を舞い上がれ！！フェザーファンネル！！」

「リフレクタービット展開！！」

6基のフェザーファンネルと12基のリフレクタービットが、一斉にカリンを取り囲んだ。

「また馬鹿の1つ覚えみたいにな・・・そんな物は私には通じないと何度言えば・・・っ！？」

だがフェザーファンネルから放たれたビームはカリンにではなく、リフレクタービットに放たれた。放たれたビームをリフレクタービットが反射し、それが別のリフレクタービットに向けて放たれ、次々とビームが反射されていく。

それがカリンにも予測不能な弾道を生み出し、情け容赦なく全方位からビームが襲い掛かった。

「くっ・・・こんな・・・っ・・・！！」

先程までシオンのフェザーファンネルを避けまくっていたカリンだったが、今度は一転して避け切れずに食らいまくっていた。

無理も無いだろう。こうも立て続けにビームを不規則に反射されたのでは、幾らカリンでも弾道を

的確に予測するなど到底不可能だ。

フェザーファンネルが的確にリフレクタービットを狙い撃ち、それをリフレクタービットが的確な角度で反射する。だがどちらかの角度がほんの少しだけでもズレてしまえば、ビームは完全に明後日の方向へと飛んでしまうだろう。それがカリンを的確に狙い撃ちしているのだ。

こんな芸当はイクシオンのエンゲージ・システムによって、シオンとステイレットが互いの思考を読んでいるからこそ出来る事なのだ。

「こんなの、息が合ってるっていうレベルじゃ・・・うああああああああああっ！！」

ゼルフィカールの飛行ユニットを破壊されたカリンが、力無く地上へと落下したのだった。

## 6. 死闘の末に

シオンがカリンを撃墜した・・・その事実はコーネリア共和国軍に希望を与え、逆にグランザム帝国軍には絶望を与えた。

無理も無いだろう。カリンはステイレットに匹敵する実力を持つ、グランザム帝国軍最強の剣士なのだ。そのカリンでさえもシオンに勝てなかったという事実は、帝国兵たちの戦意を萎えさせるのにはあまりにも充分過ぎる事態だった。

逆にシオンがカリンを打ち破った事で、コーネリア共和国軍の勢いはさらに増す事となり、完全に怖気づいてしまった帝国兵たちを次々と押し返していく。

シオンもカリンも両軍にとっての絶対的な『エース』・・・その勝敗自体が兵たちの士気に大きく影響し、戦局さえも大きく変えてしまう程の影響力を持ってしまう。

この戦闘で、もし逆にシオンがカリンに撃墜されてしまっていたら・・・逆にグランザム帝国軍がコーネリア共和国軍を押し返す結果になっていたとしても不思議ではないのだ。

この2人は両軍にとって、最早そういう存在なのだ。

「カリンちゃん！！カリンちゃ・・・」

「はああああああああああああああっ！！」

「くっ・・・！！」

マテリアのビーストマスターソードが、リアナのビームマグナムを真っ二つにした。

慌ててビームマグナムを投げ捨てたリアナが、ビームハンドガンでマテリアを牽制しながら、地上へと落下したカリンを大急ぎで救助しに行く。

マテリアも人命救助を優先したリアナを敢えて追撃しようとせず、背中からマナ・ビームガトリングガンを取り出してアーキテクトたちの援護に向かった。

その様子を帝国兵たちが、絶望の表情で見つめている。

「あのラザフォード中尉でさえも、あの男に太刀打ち出来ないって言うのかよ・・・！！」

「隊長！！敵の魔術師部隊の魔法攻撃が止まりません！！このままではあっ！！」

「ええい、引け！！引けえっ！！一旦防衛ラインを立て直・・・うわあっ！！」

コーネリア共和国軍のドラゴンライダー部隊が、上空から帝国兵たちに一斉に襲い掛かる。

兵士たちのビームマシンガンとドラゴンたちの炎のプレスが一斉掃射され、あっという間にグランザム帝国軍の一個小隊が壊滅してしまった。

上空から城下町を攻め落とそうとした航空部隊も、城からの砲撃とアリュージャースティレット・ダガー部隊によって完全に壊滅させられてしまい、地上部隊も完全に押し切られてしまっている。最早戦いの流れは、完全にコーネリア共和国軍側に傾いてしまっていた。

「ユーリ隊、バルス隊、通信途絶！！カルザス隊も壊滅した模様！！」

「総員後退しつつ陣形を立て直し、防衛線を維持せよ！！ゼルフイカール部隊はどうなっているか！？」

「現在オラトリオ少佐たちと交戦中！！こちらも押され気味です！！」

「くっ…これがコーネリア共和国軍の底力か…既に我々に勝利の芽は無し…！！このままでは…！！」

「さらにスティレット・ダガー部隊が本艦に急速接近！！もう目の前にまで迫って…うわあっ！！」

後方に陣取っているグランザム帝国軍の旗艦に、アリュージャたちが一斉に襲い掛かった。一斉に放たれたマナ・ビームマシンガンが有無を言わずに砲台を全て破壊し、マナ・グレネードが旗艦の推進部を大破させ、完全に無力化した旗艦が地上へと不時着していく。

不時着した旗艦の指令室にマナ・ビームマシンガンの銃口を突き付けるアリュージャに、パワードスーツを身に纏った帝国兵たちが左右から一斉に襲い掛かったのだが、アイラたちのビームマシンガンが彼らを情け容赦なく蜂の巣にしてしまう。

アリュージャの隣で力無く倒れ、絶命する帝国兵たち。スティレット・ダガーを身に纏ったアリュージャたちは、最早パワードスーツ如きで太刀打ち出来るような相手では無いのだ。

その様子を旗艦の艦長が、歯軋りしながら見つめていたのだった。

「私はステラちゃんと違って優しくないからね。抵抗するなら容赦なく殺すよ？」

「…分かった、我々は大人しく降伏する。だから生き残った兵たちの命と尊厳だけは保障してくれないか？」

「OK。私はシュナイダーと違って優しいからね。国際条約に則って捕虜は丁重に扱うよ。」

大人しく両手を上げた指揮官の姿を見せつけられた周囲のオペレーターたちもまた、アリュージャに対して両手を上げて降伏の意思を示したのだった。

アリュージャたちも降伏した帝国兵たちまで殺すような真似はせず、生き残った帝国兵たちを次々と拘束していく。

「いやアンタ、優しいのか優しくないのかどっちなんだい。」

苦笑いしながらアリュージャにそんなツッコミを入れたアイラだったのだが、その様子をリアナに救助されたカリンが、遠くから歯軋りしながら見つめていたのだった。

既に地上部隊は完全に押し切られ、航宙部隊も壊滅、さらに旗艦まで撃墜されたとなつては、これ以上の戦闘継続は最早不可能だ。

まして自分がシオンに撃墜されてしまった事で、味方部隊の士気が一気にガタ落ちしてしまったとなれば。

リアナの肩を借りながら、カリンが通信機をオープンチャンネルに設定し、生き残った味方部隊に一斉に呼びかけたのだった。

『旗艦撃墜に伴い、これより本作戦は我、カリン・ラザフォード中尉が指揮を執る！！生き残った兵たちは総員直ちに戦闘行為を中止し、速やかに撤退せよ！！繰り返す！！総員直ちに戦闘行為を中止し撤退せよ！！』

カリンの呼びかけにより、グランザム帝国軍の残存部隊が一斉に撤退を開始したのだった。その様子をシュナイダーがモニター越しに、とても不満そうな表情で見つめている。

『やれやれ、君には期待していたんですけどねえ。それが無様に生き恥を晒した挙句、撤退命令とは…。』

「これ以上戦闘を継続しても、兵たちを無駄に死なせるだけよ！！戦局は完全に私たちが劣勢、挙句の果てにアンタが勝手に送り込んだスパイたちも全員拘束されたのよ！？」

『…まあいいでしょう。ですがここで引くからには、君には次こそは勝つ為の算段があるんですよ？』

「生きてさえいれば、まだ幾らでもチャンスはあるわ…だけど死んでしまったら、それで何もかも終わりなのよ！？」

スティレットのマナ・ホーリービームライフルが、アーキテクトを狙おうとしたゼルフイカール部隊の少女のビームマシンガンを撃ち抜いた。

慌ててビームマシンガンを投げ捨てた少女がカリンの撤退命令を受け、スティレットをビームハンドガンで牽制しながら後退していく。

「グランザム帝国軍、撤退していきます！！」

「引くのであれば追撃はしない…全軍に徹底させなさい。」

「はっ！！」

オペレーター的女性士官たちが、兵士たちに追撃はしないよう指示を出す。

そして撤退していくグランザム帝国軍の後ろ姿を見据えながら、生き残った兵士たちが勝ち誇り、勝利の雄叫びを上げたのだった。

今回の戦いはシオンたちの活躍もあり、コーネリア共和国軍の勝利に終わった。

帝国軍最強の剣士であるカリンでさえも、最新鋭のフレームアームであるゼルフイカールでさえも、ヴァルファーレを身に纏ったシオンには勝てなかったのだ。

その事実は世界中を震撼させ、コーネリア共和国の魔法化学技術を何としても手に入れようとする他国を、さらに牽制する意味合いをも含まれているのだ。

「シオン・アルザード…この屈辱は忘れないわよ！！覚えておきなさい！！」

リアナの肩を借りながらも、カリンが部下たちを守るために殿(しんがり)を務め、ビームガトリングガンの銃口をシオンに向けながら撤退していく。

この状況でも尚、身体を張って部下たちを必死に守ろうとするカリンの姿は、彼女の隊長としての器と有能さを現していた。

そんなカリンをシオンとスティレットが互いに手を繋ぎながら、神妙な表情で見送っている。

「…そう言えばステラ。さっきエンゲージシステムで君と心を繋いだ時に、ラザフォード中尉の事情を知ったんだけど…。」

「シオンさん…。」

「父親が勝手に押し付けた多額の借金か…本当にどこにでもいる物なんだな。身勝手な親というのはさ…。」

両親に捨てられたシオンだからこそ、身に染みて分かるのだ。カリンが今までどれだけ苦しんできたのかという事を。どれだけ寂しい思いをしてきたのかという事を。

カリンもシオンと同じなのだ。両親に捨てられても尚、必死になって生き抜こうとしている。  
いや、カリンと違って施設の職員たちに大切に育てられ、父親に勝手に借金を押し付けられなかった分だけ、シオンはまだカリンよりは恵まれているのかもしれないが。

「お〜い、シオンさ〜ん、ステラちゃ〜ん。皆〜。」

そこへアリュージャたちが、慌ててシオンたちの元にやってきた。  
彼女たちの無事な姿に、シオンとスティレットは安堵の表情を見せる。

「やれやれ、何とか無事に切り抜けられて何よりだよ。アンタらも怪我は無かったかい？」  
「僕たちなら大丈夫だよ。それよりアイラ。君に相談したい事があるんだ。」  
「おっ？何だい改まって？アンタが私に相談とは珍しいねえ。」  
「君は以前、幼馴染が女弁護士だとか言ってただろう？ラザフォード中尉の借金の事についてちょっと相談したくてさ。」  
「は？借金？話の内容がよく見えないんだけど・・・。」

一体全体何が何だか、全然意味が分からないといったアイラだったのだが。  
そんなアイラに、スティレットがそっ・・・と手を繋いだのだった。

「言葉で説明するより、こっちの方が早いかもです。」  
「エンゲージ・システムかい？ジャクソンも随分とハイテクな代物を作ったもんだねえ。」  
「私はアイラさんに全てをさらけ出します。そして私はアイラさんと心を繋げる。」  
「話だけを聞いてると、アンタが変態にしか聞こえないんだけど・・・。」  
「エンゲージ・システム、起動！！」

アイラの瞳を真っすぐに見据えながら、スティレットはカリンの苦しみをアイラにも知って貰いたい一心で、エンゲージ・システムを起動させた。

カリンは借金の事を誰かに話したら殺すなどと言っていたが、やはりこんな事を1人だけで抱え込むなんて、そんなの絶対に間違っている。

そしてスティレットと心を繋げたアイラは、即座に状況を理解し・・・はああああ〜〜〜と深く溜め息をついたのだった。

「やれやれ、この期に及んで敵の心配とは・・・アンタらも随分と甘いんだねえ。」  
「ご、ごめんなさいアイラさん、でも・・・。」  
「いいよ、話は分かった。フューリーに話だけはしておくけど・・・それでもラザフォード中尉は敵国の軍人なんだ。あの子を実際に救えるかどうかまでは保証出来ないよ？」  
「はい。十分に承知しています。」  
「それにしても、多額の借金を勝手に娘に押し付けるなんて、酷い親もいるもんだよ。」

戦いを終えたシオンたちを優しく癒すかのように、美しい夕焼けの光がシオンたちを温かく包み込んでいる。

そして生き残ったコーネリア共和国軍の兵士たちが、次々と城下町へと撤退していく。

結果だけを見れば、今回の戦闘はコーネリア共和国軍の圧勝・・・だがそれでも戦いに勝利したコーネリア共和国軍側にも戦死者が何人も出てしまった。

皆、それを覚悟の上で戦場に出ているのだが・・・それでも味方に死者が出るというのは、軍人である以上は避けられない物だと分かっているけど、決して気分のいい物ではない。

だがそれでもシオンたちは、死んでいった同志たちの分まで、前を向いて生きていかなければなら



らないのだ。

「ねえカリンちゃん、リーズヴェルト中尉がカリンちゃんに何か言おうとしてたみたいだけど……」

そしてグランザム帝国の城下町へと帰還する輸送艦の中で、すっかり疲れ切ってソファの上にへたり込んでしまったカリンに、リアナが心配そうな表情で話しかけてきたのだが。

「……リアナには関係無いわよ。」

「そんな、関係無くなんか無いでしょ？だって私たちは仲間じゃ……」

「リアナには……関係無い……。」

多額の借金を父親に勝手に押し付けられたなんて、とてもじゃないがリアナたちに話せる訳が無かった。いや、下手に話してリアナたちを巻き込んでしまう訳にはいかないのだ。

この問題は、自分1人だけで片を付けなければならない……誰も巻き込む訳にはいかない……カリンはその決意を顕わにしていた。

だが同時に「誰にも相談出来ない」という状況が、カリンの心を深く締め付けてしまう。

今回の戦闘で、カリンはシオンに敗北した。

カリンがグランザム帝国軍のエースである以上、この程度の事でシュナイダーがカリンを見限る事は無いだろうが……それでも同じ失態を何度も何度も繰り返すような事態になれば、それこそカリンはシュナイダーに無能だと判断され、見捨てられる事にもなりかねないのだ。

そうなれば残された借金を、一体誰が払ってくれると言うのか。

だからこそカリンは、今度こそシオンに負ける訳にはいかないのだ。

「シオン・アルザード……今度こそ私が必ず討ち取ってみせる……！！」

「……カリンちゃん……。」

その悲壮な決意を胸に秘めたカリンを、リアナが心配そうな表情で見つめていたのだった。